千刈狸の呟き

～ 円安 ～

アナログ狸

インターネットの普及により、世界中から容易に品物を選んで購入することができるようになった。アナログ狸は個人輸入が話題になり、週刊誌などで特集されたころから、FAXで海外とやり取りしていた豪のものである。１ドル＝70円台の円高の時代には、何を買っても安く感じ、世界中から、多種多様なものを取り寄せた。だが、現在の円安の状態では購買意欲がわかず、運送費の高騰もあって、食指が動かない。

アナログ狸の子供のころは１ドル＝360円と決まっていた。この360円というのは、戦後の混乱期に交換レートがモノによって１ドル＝100円から1000円とめちゃくちゃなので、統一するための会議で、円は360度だから360円にしようと、うそのような話で決まったそうだ。

その後、日本が発展し、色々な工業製品が安くアメリカになだれ込み、360円では不都合だからと308円に上げさせられた。その後さらにグローバル化が進み、変動相場制で市場の動向で決まるようになった。

アナログ狸が、初めて海外の学会で発表した時は、１ドル＝153円くらいと今と同じくらいだったと思う。現金だと危ないと、手数料の高いトラベラーズチェック全盛の時代であった。

円安の影響はアナログ狸だけでなく、他の日本人の購買意欲にも影響を与えているとみえて、海外のオークションで日本人の好むようなものは結構値下がりしている。円安でなければ買ったのに！と思うことがしばしばだ。

それに対して、中国人の好むものは値上がりが著しい、転売が可能なように見た目がきれいなものは、特に顕著だ。味など二の次で、有名どころのワイン、モルト・ウィスキー、果てはうまくもないジャパニーズ・モルトなどが馬鹿みたいな値段する。飲まない酒は買わない！を身上とするアナログ狸には、理解不能の世界だ。

バブルのはじけた直後は倉庫代が高くつくので、在庫処分の高級ワインの投げ売りが東京でよく行われていた。倉庫の横にテントを張って、試飲させて、ケース単位で売っていた。試飲は、ほとんどただで飲ませてくれたが、ロマネ・コンティなど一部の超高級ワインだけは金をとったが、一口数千円くらいだった。ディケム、ラフィット・ロートシルト、ラトゥールなど買いまくったが、すべて、アナログ狸の腹の中におさまった。日本に７本しか入らなかったという、1959年のDRCのグラン・エシェゾーも１本７万円で買った。これはいまだにアナログ狸の買った酒で１番高い奴だ。女房狸と一緒に飲んでしまったが、その後、あのうまい酒が飲みたいというリクエストで探してみたが、なんと１本120万円もした。英国の有名オークションのクリスティーズの招待ディナーで、同じ酒を１杯飲ませてくれるというのがあったが、一人20万円以上した。

東京駅の八重洲の地下で並行輸入の安い酒が売っている店があったが、シングル・モルトが多量にあり、Springbankの30年ものが３万円くらいで売っていた。ボトラーものだが、Strathisla、Highland Park、Scapaの1948－50年蒸留の酒が売っていて、いずれも結構高い値段がついていた。その店がつぶれる直前にたまたま行ったら、その３本がいずれも２万円台に下がっていた。当然、アナログ狸の手に落ち、腹におさまった。

いずれも遠い所の話と思うかもしれないが、身近でも似た話はある。本間物産がつぶれる直前にマルホン・カウボーイでドン・ペリが投げ売りされていた。最初、白が１万円、ロゼが１万５千円だったが、買う人間がいなかったらしく、どんどん値段が下がり、白が３千円、ロゼが５千円まで落ち、アナログ狸が買い占めに走った。アナログ狸は古い作りを好むクリュギストだが、この時だけはドン・ペリを飲みまくった。その後ドン・ペリを飲む機会に恵まれない。

今の円安は実勢にあってはいないので、いずれ、また円高に振れるに違いない。アナログ狸の寿命が尽きる前に至福の時がまた来てほしいものだ。